

白ヶ原遺跡

村道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書

1987.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が臼ヶ原遺跡

序

悠遠の昔、人類の最大の課題は自然の脅威を克服する事であります。私達の先人は厳しい自然環境と戦い試行錯誤を繰り返しながら、一步一步生活しやすい環境を作り上げてまいりました。そして現在、私達人類は高度な文明社会を築き上げいわば繁栄の頂点とも言える状況をむかえています。しかし一方では人類が自ら生み出したとも言える種々の問題もまた起こりはじめております。過度な開発による自然破壊や公害等の発生、極度に緊張した社会生活に伴うストレスの蓄積、ノイローゼ等の心の病の増加など、その一面を見ただけでもその内容は非常に深刻なものがあります。古くから『温故知新』と言う言葉があります。文字通り昔の事を訪ね求める事によって新しい見解や知識を得る事ですが、私達が行う発掘調査によって先人達の足跡を学び、原点に立ち返ってみる事が、私達がこれからとるべき道を選ぶ道標の一つになるとすれば本当にすばらしい事ではないでしょうか。私共は常々その様な夢と願いを持って発掘調査を続けて参りました。今回刊行させていただく事になりました「白ヶ原遺跡発掘調査報告書」にもその様な願いが託されています。

白ヶ原遺跡は、村道改良工事に先立って、原村教育委員会が昭和53年3月1日から31日にかけて発掘調査を行ったものであります。

発掘調査から報告書刊行に至るまで大変な御尽力を頂いた関係各位に対しまして深甚なる謝意を表します。

昭和62年3月31日

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例　　言

1. 本報告は、村道改良工事に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木に所在する白ヶ原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、原村教育委員会が昭和53年3月1日から31日にかけて実施した。
3. 現場における遺構実測と記録・写真撮影・遺構トレス・編集は平出一治、土器の拓本は平林とし美、石器実測・トレスは高見俊樹を行い、執筆は武藤雄六と平出が話し合いのもとに行った。
4. 本調査の出土遺物・記録等はすべて原村教育委員会で保管している。

目　　次

| | | |
|-------------------|------------------|---|
| 序 | 小豎穴 | 3 |
| 例　　言 | 小豎穴 | 4 |
| 目　　次 | 小豎穴 | 5 |
| I 発掘調査の経過……………1 | 小豎穴 | 6 |
| 1 発掘調査に至る経過 | 小豎穴 | 7 |
| 2 調査の経過 | 小豎穴 | 8 |
| II 遺跡の立地……………4 | 2 繩文時代の遺物 | |
| 1 遺跡の位置と環境 | 土　　器 | |
| 2 過去の調査 | 石　　器 | |
| III 発掘調査の概要……………4 | 3 平安時代以降の遺物 | |
| 1 グッリドの設定 | 土器と陶器 | |
| 2 発掘の状況と土層 | V 小豎穴について……………16 | |
| IV 遺構と遺物……………7 | VI 結　　語……………20 | |
| 1 繩文時代の遺構 | 参考文献 | |
| 小豎穴　1 | 発掘調査団名簿 | |
| 小豎穴　2 | | |

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

村内における農業の近代化の波は著しく、大型機械が使用される機会は多くなる一方で、幅の狭い従来の農道では不便を来たすことが年々多くなり、農道の拡張工事はあとをたたない状況である。

たまたま、臼ヶ原遺跡が立地する尾根の中央やや北寄りにも、古くから尾根と同方向に走る幅員が狭い農道があり、ここも例外ではなく、昭和52年度に拡張工事が計画された。

村教育委員会では、遺跡保護にたいする検討を行うなかで、工事の主体者である原村役場建設課と協議を進め、記録保存のための緊急発掘調査を昭和52年12月に実施することにした。

しかし、昭和52年11月に発掘調査に着手した前尾根遺跡（発掘当時は上前尾根遺跡と呼称）の調査が、当初の計画より大幅に長引き、本遺跡の発掘調査は冬期間に入り、実施困難の状況になってしまった。そこで、関係者と再協議を行い発掘の時期を延期し、昭和53年3月1日から31日にわたり緊急発掘調査を実施した。

2 調査の経過

発掘は、長野県諏訪郡原村6549番地1、原村教育委員会教育長松沢達が発掘責任者となり、発掘担当者には日本考古学協会員の武藤雄六と原村教育委員会の平出一治が当たった。

発掘日誌

昭和53年2月21日 発掘準備をはじめる。作業は地元柏木区の人たちにお願いすることとし、作業員の募集をはじめる。

試掘穴を掘り土層の観察を行う。表土層（耕作土層）は16～20cm、黒褐色土層が6～13cmの厚さがある。その下にソフトローム層が認められた。表土の取り除きは重機で行うことにして、重機の手配をする。

2月27日 重機により表土剥ぎをはじめる。

発掘機材の搬入とテントの設営。表土剥ぎの終わった東側からグリッドの設定をはじめる。

2月28日 グリッドの設定。9時頃から雪が降りはじめる。10時頃には雪が多くなったため作業は半日とする。

3月1日 発掘開始にあたって教育長挨拶のあと、A地区からグリッドの平面発掘をはじめるが、風が強く作業は思うように進まない。今日も、10時頃には小雪が降りはじめたため、作業は半日とする。

- 3月2日 A地区・B地区のグリッド発掘。午前中に黒曜石2点、午後1点出土する。小豎穴1・小豎穴2を検出する。午後から小豎穴2の精査を行うが、遺物の発見はない。青沼博之・村上孝兩氏がみえる。南信日々新聞の取材。
- 3月3日 A地区・B地区のグリッド発掘。黒曜石1点出土。小豎穴3・4・5・6を検出する。
- 3月6日 発掘担当者(武藤)の話しの後、B地区・C地区的グリッド発掘と小豎穴の精査。
小豎穴の土層観察を行い実測をはじめる。
長崎元広氏がみえる。
- 3月8日 B地区・C地区的グリッド発掘と小豎穴の精査。小豎穴7・8を検出する。小豎穴の写真撮影。
- 3月9日 今日から作業員は2人とし、小豎穴の精査・写真撮影および実測。
- 3月13日 グリッドの杭等を抜き片付けをはじめる。作業は半日。
- 3月14日 発掘機材の撤去をする。作業は半日。
- 3月30日 発掘機材の水洗いをし、本調査は終了する。



表1. 白ヶ原遺跡と付近の遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 旧石器 | 縄文 | | | | | 弥生 | 古墳 | 奈良 | 平安 | 中世 | 近世 | 備考 |
|----|-------|-----|----|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|--------------------|
| | | | 草 | 早 | 前 | 中 | 後 | | | | | | | |
| 8 | 比丘尼原北 | | ○ | ○ | | | | | | ○ | | | | |
| 9 | 比丘尼原 | | | | ○ | | | | | ○ | | | | |
| 10 | 柏木南 | ○ | | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | 昭和51年発掘調査 |
| 11 | 阿久 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | | | 国史跡 昭和50~53年発掘調査 |
| 12 | 前沢 | | | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | 昭和55・61年発掘調査 |
| 13 | 長峰 | | | | ○ | | | | | ○ | | | | |
| 14 | 裏長峰 | | | | ○ | | | | | | | | | |
| 16 | 恩諸南 | | | | | | | | | ○ | | | | |
| 17 | 白ヶ原 | | ○ | ○ | | | | | | ○ | ○ | | | 昭和53年発掘調査 |
| 18 | 前尾根西 | | | | ○ | | | | | | | | | |
| 19 | 南平 | | | | ○ | | | | | | | | | |
| 20 | 前尾根 | | | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | 昭和44・52・53・59年発掘調査 |
| 21 | 上居沢尾根 | | | | ○ | | | | | | | | | |
| 22 | 清水 | | | | ○ | | | | | | | | | |
| 26 | 家下 | | | | ○ | | | | | ○ | | | | 昭和59年発掘調査 |
| 42 | 居沢尾根 | | | | ○ | | | | | ○ | | | | 昭和50~52・56年発掘調査 |
| 43 | 中阿久 | | | | ○ | | | | | | | | | 昭和51年発掘調査 |
| 44 | 原山 | | | | ○ | | | | | ○ | | | | |
| 45 | 広原日向 | ○ | | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | 昭和58年発掘調査 |
| 46 | 宿尻 | | | | ○ | | | | | | | | | |
| 47 | ヲシキ | | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | 昭和51年発掘調査 |
| 48 | 榆の木 | | | | ○ | | | | | | | | | |
| 49 | 大石 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | | | 昭和50年発掘調査 |
| 50 | 山の神 | | | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | 昭和54年発掘調査 |
| 52 | 水掛平 | | | | ○ | | | | | ○ | | | | |
| 53 | 雁原沢 | | | | ○ | | | | | | ○ | | | 昭和54・57年発掘調査 |
| 54 | 宮ノ下 | | | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | | 昭和57・58年発掘調査 |
| 55 | 中尾根 | | | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | |
| 56 | 家前尾根 | | | | ○ | | | | | ○ | | | | |

II 遺跡の立地

1 遺跡の位置と環境

白ケ原遺跡（原村遺跡番号17）は、長野県諏訪郡原村柏木区の南方に位置している。遺跡は東の八ヶ岳から流下する大早川と阿久川にはさまれた、東西に細長いやせ尾根から北に発達しているなだらかな斜面に立地している。付近一帯の地目は普通畠で、遺物の散布範囲はあまり広くないようである。なお北側を流れる大早川の沢は浅く水田として利用されている。標高は925m前後を測る。遺跡の保存状態については取り立てて述べることはなく普通である。

このあたりは八ヶ岳西麓のほぼ中央にあたり、付近には縄文時代を中心とする大小さまざまな遺跡が分布していることは古くから知られていた（第1図、表1）。

それらの中ですでに発掘調査が実施され、その性格が把握されているものの中には、第1図11の阿久遺跡（国史跡）、20の前尾根遺跡、42の居沢尾根遺跡、49の大石遺跡、50の山の神遺跡などがあり、それぞれ時期は異なるものの、環状ないしは馬蹄形をなす当方を代表する大集落跡も発見されている。

2 過去の調査

本遺跡が発見されたのはそう古いことではなく、昭和48年から諏訪清陵高等学校地盤部考古班の諸氏が実施した、村内の遺跡分布調査の折に、土師器の破片5点を採集したことにはじまっている。報告では「規模は小さいが、原村には珍しく、土師器の時代の単一遺跡として重要である。」としている。

その後はこれといった踏査および調査はされることがないまま本調査に至った。

III 発掘調査の概要

1 グリッドの設定

重機で表土を取り除いた後に、道路の測量基準クイを基点に東西南北に軸を合わせた2m四方を1単位とした基準方眼のグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、東からA地区・B地区・C地区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに 2×2 mの小地区（グリッド）に分割し、東西方向は東からA～Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを51とし、そのラインを基準に南方向は52・53・54というように南に行くにしたがい大きくなるように、北方向は50・49・48と小さくなるよ

うに振り分けた。

個々のグリッドの呼びかたは、北半分を調査しただけのグリッドで例は悪いが、第3図の調査区南西外れのグリッドについては、大地区はC地区であり、小地区的東西方向はGラインにあたる。

南北方向が40ラインで、それは「G-40」となる。したがって、小地区的前に大地区を表記した「CG-40」となる。

2 発掘の状況と土層

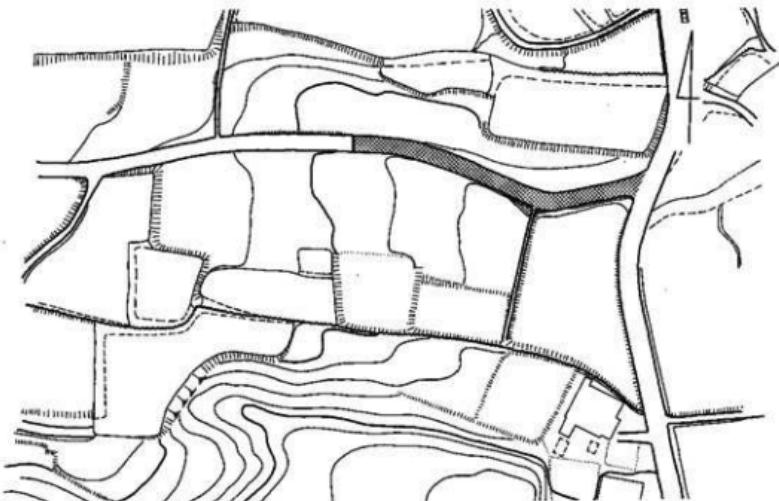
第3図のグリッド配置図に示したように、農道の拡張工事対象範囲内の平面発掘を実施した。出土遺物は極めて少なかったが、小豎穴8基を検出調査することができた。しかし、幅員6mという制約された範囲の調査であり、すべての小豎穴を完掘することはできなかつたといふものの、7基の小豎穴には規格性がみられた。

発掘はローム層上面まで行ったが、本遺跡における基本層序は次のとおりである。おおまかな観察結果を記しておきたい。

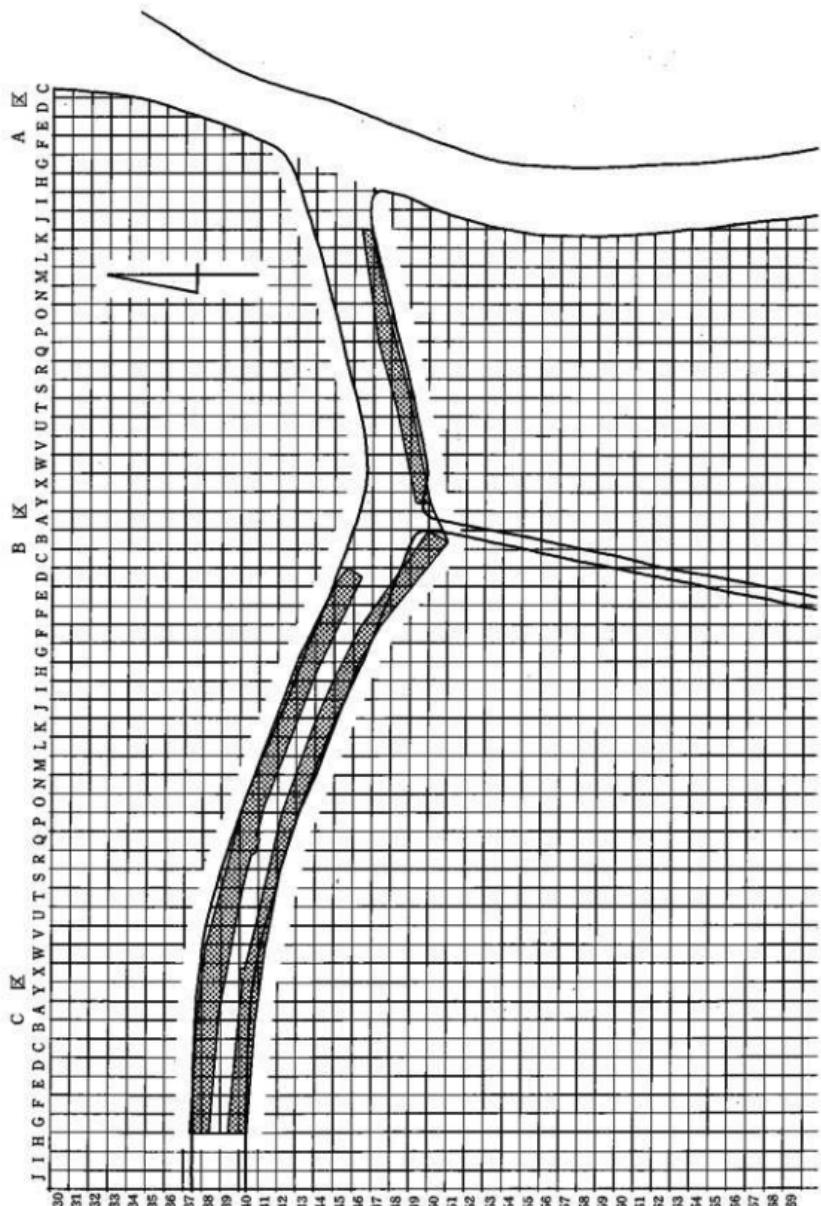
第I層 黒褐色土層 煙の耕作土層で18cm前後の厚さである。

第II層 黒褐色土層 10cm前後の厚さで第I層より黒色がやや強くなる。道路際のためか擾乱された箇所がしばしばみられ安定していない。

第III層 摰乱層 摰乱された時期はわからない。深いものでは第IV層に達している箇所もある。



第2図 白ヶ原遺跡発掘調査区域図・地形図(1:2,000)



第3図 グリッド配置図

第IV層 漸移層 ローム層からの漸移層で、A地区で部分的に認められただけである。

第V層 ソフトローム層 やはり認められた箇所は少ない。道路際では一切認められなかった。

第VI層 ローム層 小豎穴も壁で見る限りでは角礫を含むしている箇所もある。

調査対象地域は旧道をはさんだ幅6mという制約された範囲であったが、実質的には、旧道の両側の極めて狭い範囲を調査しただけである。畠地よりも路面が低かったこともあり、第II層の説明でも記載したように、道路際は、農道ができた頃より長年にわたって、崩れたり流されたりしたように思えるし、その修復も行われたであろう。また、草や芝の根による擾乱も著しく、全体に不安定な土層で良くなかった。

IV 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構

発掘調査の結果、発見した遺構は縄文時代の小豎穴8基だけである(第4~7図)。便宜上それらの小豎穴には1~8の番号をふったが、制約された範囲内の調査で、完掘した小豎穴は2・6・7の3基と少ない。それらの小豎穴について若干の説明を記してみたい。

小豎穴1 (第4図、第5図1)

発掘区の北東、BC-45-BD-45グリッドから用地外にかけて、ローム層に黒褐色土の落込みを3月2日に確認した。用地外にかかるはいたが、平面プランは推定できる状態で、円形を呈する小さな住居址とも思えた。しかし、3月6日に行った精査の結果、小豎穴であることが把握できた。

結果的には、南側の約半分を調査しただけであるが、壁の立ち上がりは二段となっている。その状態は、上段から中段まではあまり確っかりしていないが、中段から底にかけては確っかりしている。埋土の堆積は自然埋没したと思われる状態で、上層から黒褐色土・褐色土の2層に大別できた。底近くにはローム粒が混入していた。埋土の観察では擾乱および人為的な現象は一切認められず、壁が二段に立ち上がっていたが、二つの遺構が重複したものではない。

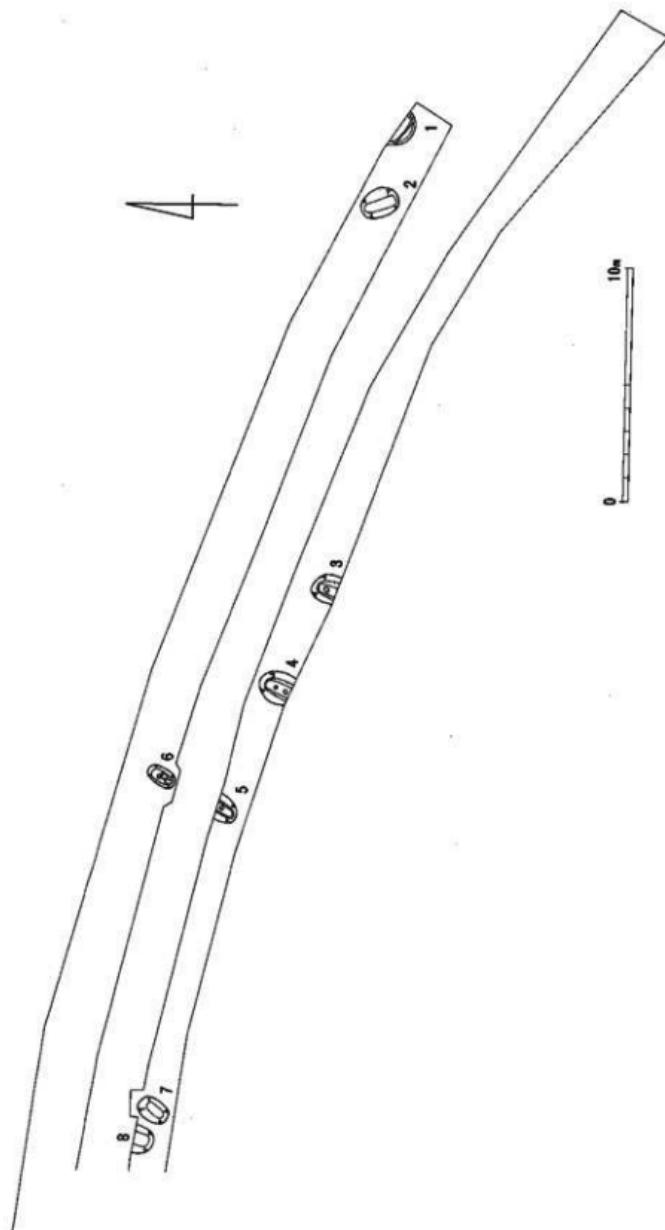
平面形は、径180cm位の円形と思われる。中段から底の形状は隅丸長方形ないしは橢円形となる。底は平らであるがやや北に傾いている。深さは中段までは27cm、底までは45cmである。

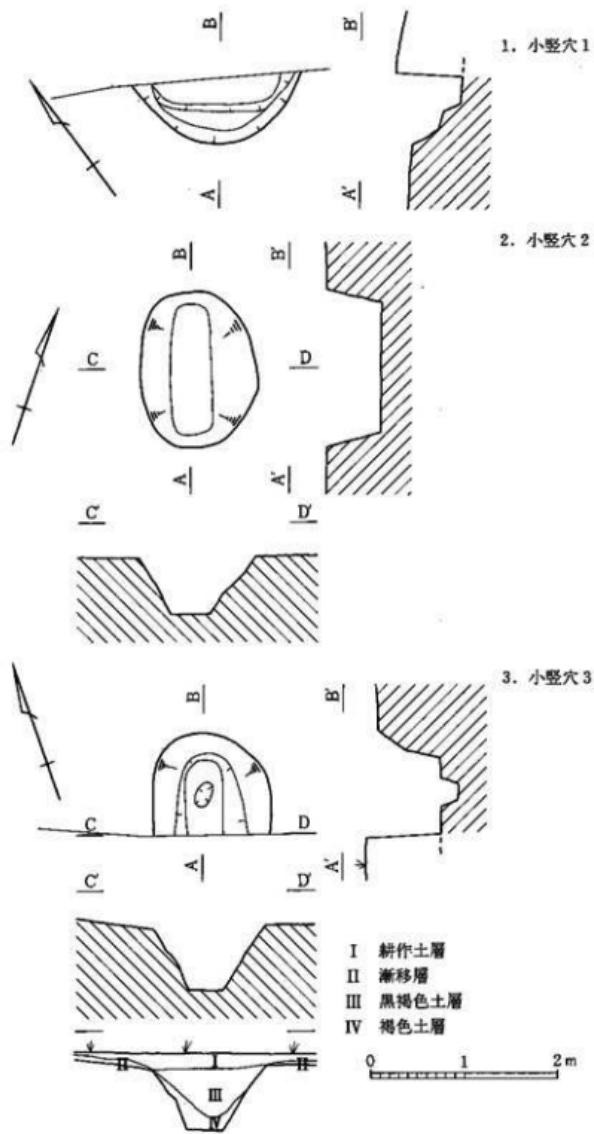
平面形に違いはみられるが、中段および底の形状から小豎穴2~8と同様な施設とも考えられる。

遺物の発見は皆無である。

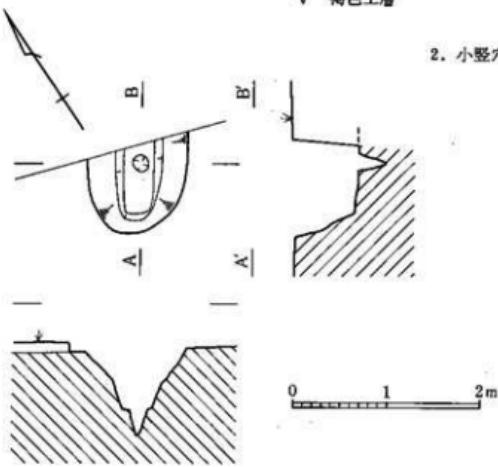
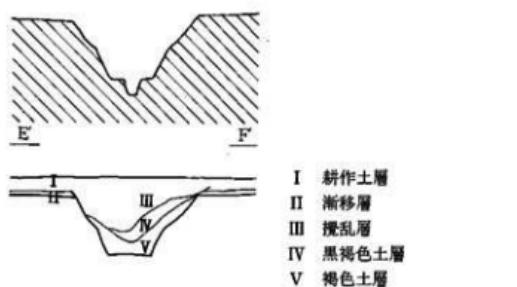
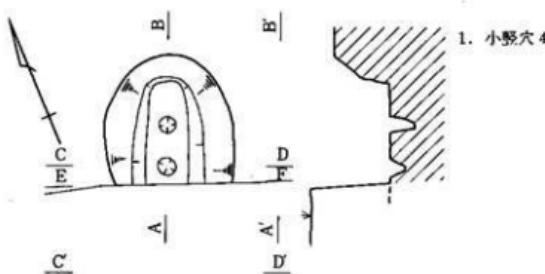
小豎穴2 (第4図、第5図2)

第4圖 小型穴分布圖

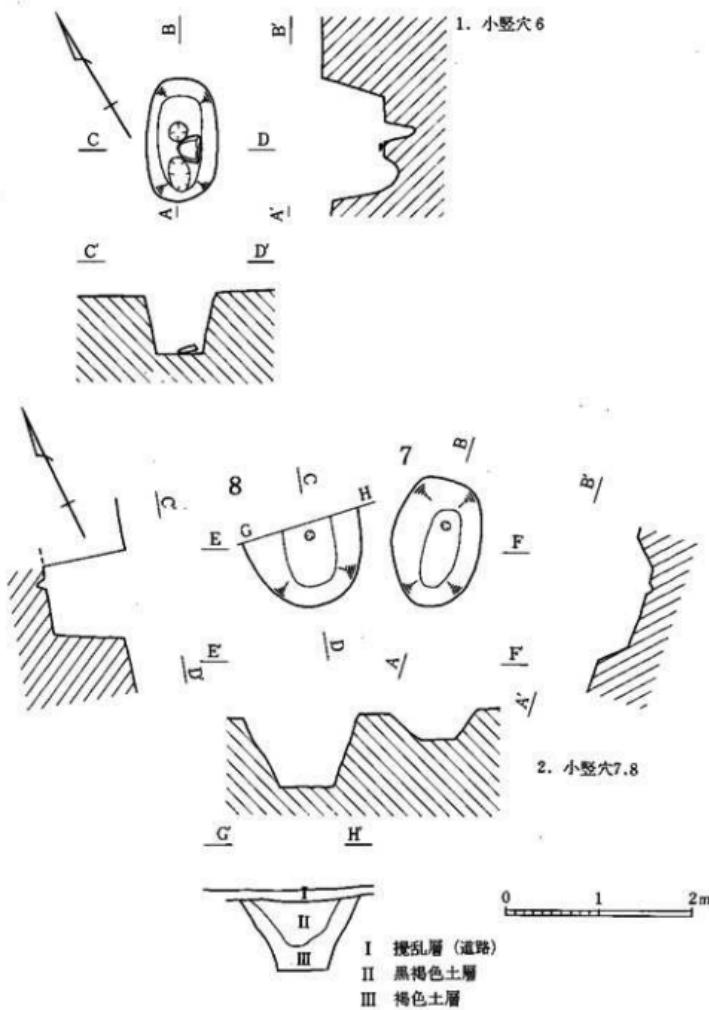




第5図 小竖穴1～3実測図・土層断面図(1:60)



第6圖 小竖穴4~5実測図・土層断面図(1:60)



第7图 小竖穴6~8实测图·土层断面图 (1:60)

小豎穴 1 の西方にあたる BD-44・BD-45・BE-44・DE-45 グリッドで、3月 2 日にローム層に黒褐色土と褐色土の落込みを認め精査を行う。埋土の堆積はレンズ状となるが、上層から黒褐色土・褐色土の 2 層に大別できる。底近くの褐色土中には、壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が多量に混入していた。その状態からみて自然埋没したものと思われる。なお、プラン確認面での埋土の観察は、外周に幅は狭いが褐色土がめぐり、その内側に黒褐色土が認められるという状態であった。これは、結果的には埋没した小豎穴の上方を輪切りにした時の状態である。したがって、当時の壁高は検出面よりも高かったことを物語ることになろう。

平面形は長軸 162cm、短軸 126cm を計る橢円形を呈するが、底は隅丸長方形である。壁の東西辺は確っかりした立ち上がりを持ち、ほとんど壁土の落下はなかったようである。南北辺は断面形でもわかるように、底から 30cm 位の立ち上がりは確っかりしているが、それより上はスリット状となり、壁土の落下は著しかったようである。この状態からみると、当時の平面形は底の形状に近いものであったと思われる。深さは 63cm で、底は平らでほぼ水平である。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴 3 (第 4 図、第 5 図 3)

旧道の南側の BM-43・BM-44 グリッドから用地外にかかり、黒褐色土の落込みを 3 月 3 日に認め精査を行う。埋土の堆積はレンズ状となるが、上層から黒褐色土・褐色土の 2 層に大別でき、底近くの褐色土中には、壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が多量に混入していた。その状態から自然埋没したものと思われる。

平面形は、北側の約半分を調査しただけであるが、完掘した小豎穴 2・7 と同様の橢円形となる。長軸は不明であるが、短軸は 124cm である。壁の立ち上がりは底から 30~35cm は確っかりしているが、それより上はスリット状となり、壁土の落下は著しかったようである。深さは 74cm で、底は平らでほぼ水平となるが、小穴がほぼ垂直に 1 個穿たれていた。小穴は長軸 28cm、短軸 17cm のタマゴ形を呈し、深さは 20cm である。なお、小豎穴 4 の小穴のあり方からみると、本址の未調査部分にも小穴が穿たれていることは容易に考えられる。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴 4 (第 4 図、第 6 図 1)

小豎穴 3 の西側にあたる BO-42・BO-43 グリッドから用地外にかけて 3 月 3 日に発見した。上面が擾乱されていたため、小豎穴の存在を考えずに擾乱層を取り除く作業途上で、本址を認め精査を行った。埋土の堆積はレンズ状となるが、上層から擾乱・黒褐色土・褐色土に大別できる。底近くの褐色土中には壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が多量に混入していた。その状態から自然埋没したものと思われる。

平面形は、全掘できなかつたが推測できる状態で、長軸は推定 190cm、短軸 138cm の橢円形とな

ろう。壁の立ち上がりは底から32~35cmは確っかりしているが、それより上はスリ鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。なお、壁は擾乱による破壊もあるかもしれない。深さは66.5cmで、底は平らではほぼ水平となるが、円形の小穴がほぼ垂直に2個穿たれていた。それは径が19cmで深さが20.5cmと、径が17cmで深さが29cmのものである。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴5 (第4図、第6図2)

小豎穴4の西側にあるBQ-41・BR-42グリッドから旧道にかかる、黒褐色土の落込みを3月3日に認め精査を行う。道路による擾乱箇所もあり状態は良くなかった。埋土の堆積はレンズ状となるが、上層から黒褐色土・褐色土の2層に大別できる。底近くの褐色土層中には、壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が混入していた。その状態から自然埋没したものと思われる。

平面形は、南側の約半分を調査しただけであるが、完掘した小豎穴2・7と同様の橢円形となる。壁の立ち上がりは底から24~31cmは確っかりしているが、それより上はスリ鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。深さは64cmで、底は平らではほぼ水平となるが、円形の小穴がほぼ垂直に1個穿たれていた。それは径が17cm、深さが30cmである。なお、本址は約半分を調査しただけであり、明確なことはわからないが、小穴が穿たれている位置からみて、1穴が穿がれたれただけであろう。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴6 (第4図、第7図1)

旧道の北、小豎穴5の北側にあるBQ-40グリッドのほぼ真中で、黒褐色土の落込みを3月3日に認めた。南側の一部が旧道にかかっていたため、その範囲は旧道下の調査も行った。道路による擾乱ははなだしく良い状態ではなかった。埋土の堆積はレンズ状となり、上層から擾乱・黒褐色土・褐色土に大別でき、自然埋没したものと思われる。底近くの褐色土にローム粒の混入はみられはしたが、その量は少なく壁土の落下はあまりなかったようである。

平面形は、長軸131cm、短軸77cmとやや小さいが隅丸長方形である。壁の立ち上がりは確っかりしている。これが当初の形態により近いものであろう。深さは65cmで、底は平らではほぼ水平となるが、円形と橢円形の小穴がほぼ垂直に穿たれている。円形の小穴は径が19cmで深さは33cm、橢円形の小穴は長軸は36cm、短軸21cmで深さは18cmを測る。底面に一部分を接しやや傾いた状態で平板石が1個入っていた。その大きさは縦28cm、横24cm、厚さ6cmである。これは当地方で産出する輝石安山岩で、打痕・磨痕など人為的な痕跡は一切認められない自然石であった。したがって、遺物の発見は皆無である。

小豎穴7 (第4図、第7図2右)

小豎穴5の西方にあたるBX-50グリッドで、小豎穴8に隣接した状態で3月8日に検出し、精査を行う。埋土の堆積はレンズ状となり、上層から・黒褐色土・褐色土の2層に大別できる。褐色土中には壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が多量に混入していた。その状態から自然埋没したものと思われる。なお、プラン確認面での埋土の観察は、外周に褐色土がめぐり、その内側に黒褐色土が認められるという状態であった。これは小豎穴2と同様に、埋没した小豎穴の上方を輪切りにした時の状態であり、当初の壁高は検出面より高かったことを物語っている。

平面形は、長軸138cm、短軸98cmの不整タマゴ形を呈する。深さは33cmと浅いが、壁はスリ鉢状になだらかに立ち上がっている。褐色土中にロームの塊と粒が多量に混入していたことを考え合わせると、構築当初の壁はすでに落下してしまっているものと思われる。底は平らではほぼ水平となるが、底面北寄りには径9cm、深さ5cmとやや深い円形の小穴がほぼ垂直に穿たれている。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴8（第4図、第7図2左）

小豎穴7の西側に隣接する。BX-40・BY-40グリッドから旧道にかけて3月8日に検出した。プラン確認面での埋土の状態は、外周に褐色土がめぐり、その内側に黒色土が認められた。これは小豎穴2・7同様に、埋没した小豎穴の上方を輪切りにした時の状態であり、当初の壁高は検出面より高かったことを物語っている。埋土の堆積はレンズ状となるが、上層から黒褐色土・褐色土の2層に大別できる。底近くの褐色土中には壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が混入していた。その状態から自然埋没したものと思われる。

平面形は、南側の約半分を調査しただけであるが、完掘した小豎穴2・7と同様の椎円形となる。長軸は不明であるが、短軸は126cmである。壁の東西辺は比較的確っかり立ち上がりで、ほとんど壁土の落下はないようである。南北辺は底から25~30cmの立ち上がりは確っかりしているが、それより上はスリ鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。深さは78cmで、底は平らではほぼ水平となるが、径9cm、深さ8cmとやや深い円形の小穴がほぼ垂直に穿たれていた。

遺物の発見は皆無である。

以上が小豎穴のおおまかな説明であるが、どの小豎穴からも遺物の発見はなく、帰属時期の決定はできない。しかし、近隣の調査例から縄文時代早期のものと考えてさしつかえなかろう。

2 縄文時代の遺物

発掘調査では、黒曜石を3点発見したにすぎない。調査期間中にわずかな土器と石器を表面採集している。それらの資料に若干の考察を加えてみたい。

土 器

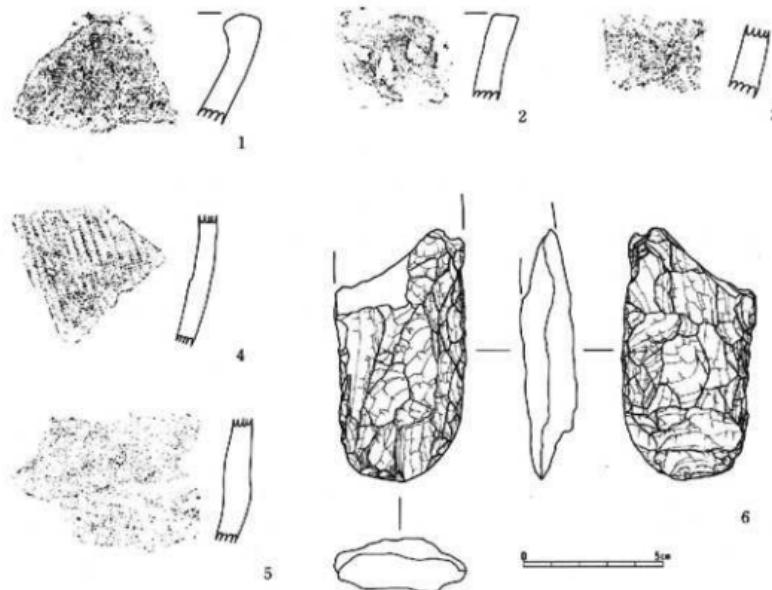
縄文式土器は9点ある。全て表面採集したもので、いずれも小破片で器形の判別できるものはない。

第8図1～3は素文土器であるが、1・2は口縁部破片で、2は器面が薄く剥落している。形状・胎土および焼成から中期中葉の曾利I式であろう。3は胎土および焼成から中期後半のものと思われる。図示していない6点は小破片の上、無文ないしは磨滅が著しいものばかりで、明確な時期を判別することはできないが、胎土および焼成から中期後半に帰属するものであろう。

石 器

第8図6は、表面採集した結晶変岩製の打製石斧で、基部側の約半分を欠損している。整形は粗いが形態は整っている。当地方で発見されるものと、これといって違う点はみられない。縄文時代中期の所産であろう。

黒曜石は図示していないが、発掘調査で出土した3点と、表面採集した6点の計9点あるが、取り上げて述べることはない。



第8図 土器拓影と石器実測図(1:2)

3 平安時代以降の遺物

全て表面採集したもので、小破片ばかりであるが、土師器・須恵器・灰釉陶器・内耳土器がある。

土器と陶器

土師器は小破片ばかり12点あるが図示していない。全て赤褐色を呈し、調整・焼成は比較的良いものばかりで、糸切底の認められるものもある。全て壊の破片と思われる。焼成は普通である。第8図4は須恵器の破片で、叩き目痕がある。灰釉陶器も小破片のため図示しなかったが、高台付碗の底部破片である。須恵器と灰釉陶器は各1点である。

第8図5は、内耳部分の破片でないため明確なことはわからないが、その胎土と焼成から内耳土器の胴部破片と思われる。拓影にみられる沈線は焼成後に付いた傷痕である。

帰属時期については、全て小破片のため明確な同定はできないが、土師器・須恵器・灰釉陶器は当地方の平安時代後期の住居址出土資料と同様であることから、12世紀であろう。内耳土器については不明瞭な点が多く、ここでは中世の所産と考えておきたい。

V 小豎穴について

本調査では、8基の小豎穴を調査したが、遺構説明でも記載したように、小豎穴1はその機能面においては同様であったことも考えられるが、平面形に際立った違いがみられたため、ここでは小豎穴2～8の7基についてふれてみたい。

まず、小豎穴の平面形であるが、楕円形(2～5・8)、タマゴ形(7)、隅丸長方形(6)に大別することができる。埋土の観察では、楕円形とタマゴ形は壁土の落下が著しいため、当初の形態を示しているとは思えない。隅丸長方形の小豎穴6も壁土は落下しているがその量は少なく、当初の形態に近いものであろう。それは小豎穴縁部と底面の形状がほぼ同じである点から考えると、少ない資料で問題点を残すことになるが、楕円形とタマゴ形の小豎穴も、底面の形状は隅丸長方形を呈し小豎穴6と同じである。したがって、壁土が落下する前の縁部の形状は小豎穴6同様に隅丸長方形を呈していたのであろう。

小豎穴の隅丸長方形を主軸と考え、主軸に目を向けてみると、第9図に示したように、小豎穴2以外は29度内に入り、ほぼ同じ方向を向いているということができよう。その僅かな違いは主軸方向が地形の等高線に対して、ほぼ直角に交差する方向を指しているためのようであり、構築場所の地形によって生じているようである。小豎穴2の主軸方向は、方位的にみるとたしかに違っていたが、視点を変え、等高線に直角に交差する方向を向いているという点では同じであり、全ての小豎穴が同じ条件で構築された施設であったといえよう。したがって、小豎穴の主軸は、地形と密接な関わりを持っていたことになる。これは小豎穴の性格を物語る大きなカギの一つに

なろう。同じ条件下で構築された小豎穴が単独で機能していたことは考えにくく、多くの小豎穴があつてはじめて機能した施設のようである。

しかし、調査範囲が限られていたため、調査区以外にも同様な遺構が埋没していることは容易に考えられることであり、現状では小豎穴が遺跡内のどのような位置にどれ位構築されていたのかを把握するまでには至っていない。

小豎穴からは、帰属時期や性格を究明する上での手掛りとなる遺物の発見は皆無であった。性格については、遺構の特徴の一つでもある底面に穿たれている小穴を手掛けとして考えてみたい。

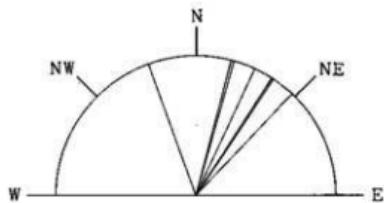
小穴は小豎穴 2 で確認できなかったほかは、その形状や大きさ深さ、数にこそ違いはあるが検出できた。

多くの研究者の研究では、このような施設はイノシシやシカなど大形動物を対象とした「陥し穴」といわれ、底面の小穴は、陥し穴として有効に機能させるために、仕掛け用の竹や棒(槍)をさしたものとされている。近隣では岡谷市の扇平遺跡で、底面に小穴を持たない同様な遺構が10基発見されている。その性格については陥し穴と考えていることからみて、本遺跡の小豎穴 2 も小穴は確認できなかったが、陥し穴と考えてさしつかいないさうである。なお、他の遺跡発見例に目を向けてみると、小穴を持つものが圧倒的に多いようである。

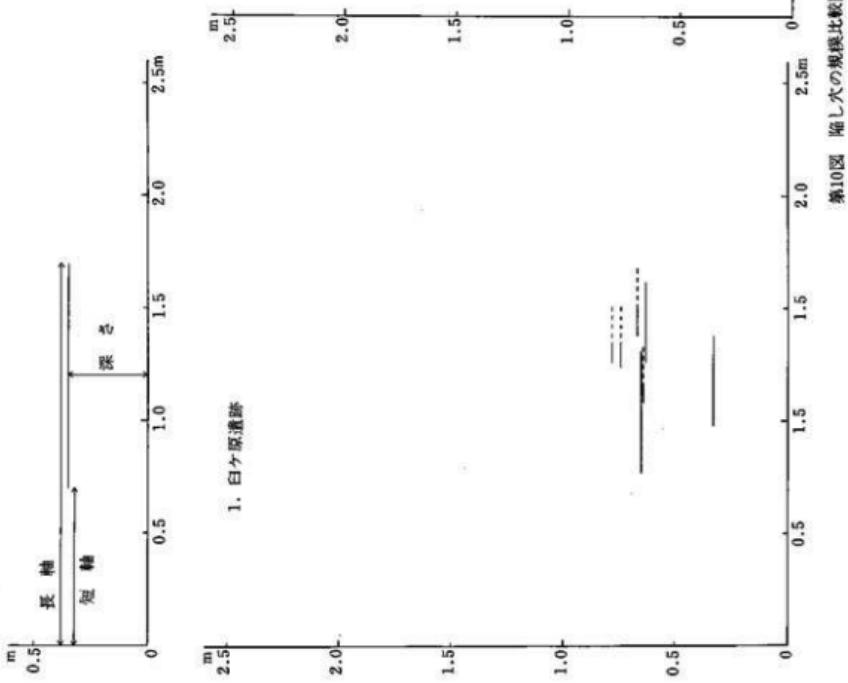
陥し穴と考えたとき、本遺跡発見の小豎穴はやや規模が小さいようにも思えたため、第10・11図に示したように、近隣の調査地方では富士見町の御射山・手洗沢、茅野市の御射山西・よせの台・与助尾根南・城之平、岡谷市の扇平の諸遺跡で発見されているものと、また東京都多摩ニュータウンの424・726・727・728遺跡で発見されているものと比較してみた。それによると、平面規模においては問題はなさそうであるが、深さがやや浅いようである。遺構説明のところでも記載したが、小豎穴 2・7・8 の壁高は検出した面よりも構築当初の方が高かったようである。その高さを加味してもまだ浅い小豎穴が多い。

平面形が隅丸長方形を呈する陥し穴は、対象となる大形動物が何の方向から来てもその機能が発揮できるように作られたものではなく、動物の習性を考慮した上で方向を設定したことが考えられる。小豎穴の短軸方向の規模は、小さいもので77cm、大きいものでも138cmである。これは壁土が落下した後の数値であるため、構築時はまだこれよりも小さかったことになる。この数値では、動物の体長に対しては小さすぎるよう

である。したがって、動物の進行方向と短軸が一致していても、十分に機能を発揮できたとは思えない。主軸である長軸と動物の進行方向が一致したと考えた方がより自然である。動物の習性についてくわしいことが判らないので、ここでは多くを語ることはできないが、長軸の方向は前記したように、等高線に直角



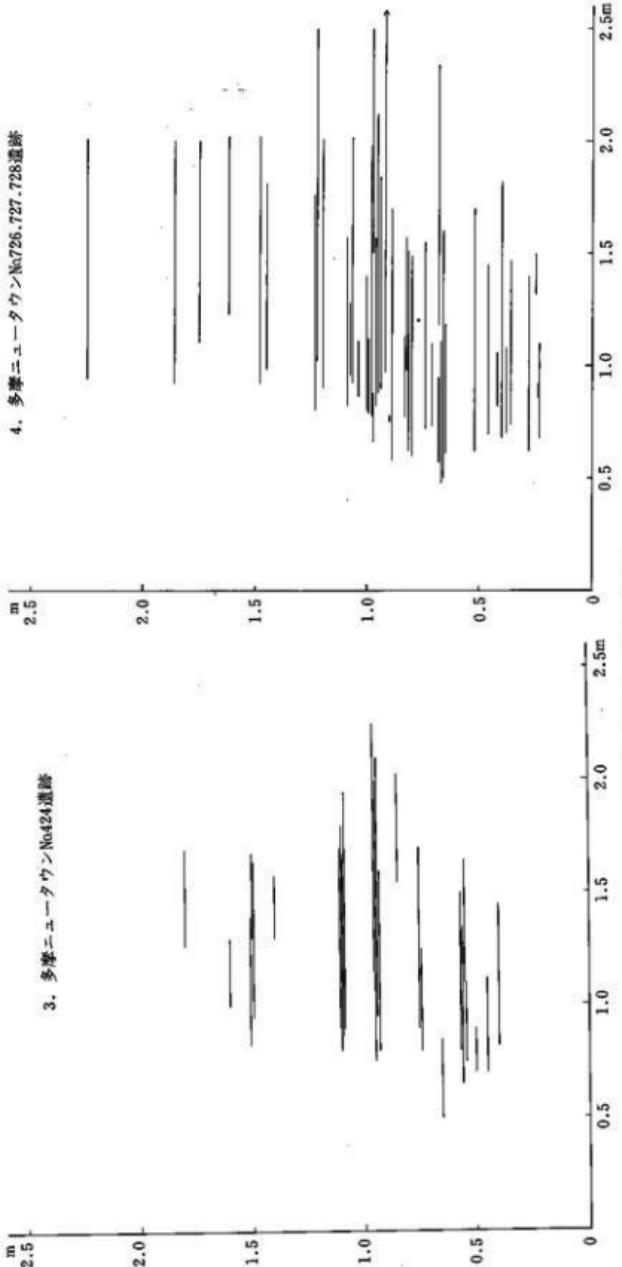
第9図 小豎穴主軸(長軸)方向



第10図 滝し穴の規模比較図(1)

3. 多摩ニュータウンNo424遺跡

4. 多摩ニュータウンNo726.727.728遺跡



第11図 隠し穴の規模比較図(2)

に交差するという法則的な傾向にあり、対象動物をある程度限定していくこともできそうである。幅が狭く細長い陥し穴は、落込んだ動物が容易に出られないための考慮であろう。それは、動物の体長と穴の大きさが一致した方がより効果的な上に、底には槍がたてられていることなど、平面規模が小さい上に浅く作られた陥し穴であっても、その機能が十分発揮できる工夫がされているようである。

VI 結 語

白ヶ原遺跡は、柏木区から河久遺跡方面へ通ずる農道の拡張工事に伴って実施された緊急発掘調査によって、その性格が判明した。

調査により、縄文時代早期に帰属すると考えられる小竪穴 8 基が発見されたが、土器・石器などの遺物は遺存していなかった。この種の竪穴に共通する特徴である。

小竪穴以外に際立った特徴を示す遺構は発見出来なかつた。また、遺物も黒曜石 3 点を発見したにすぎず、遺跡の性格としては極めて希薄な状態であった。

しかし、分布調査や表探調査によれば、縄文時代中期の土器破片 9 点と打製石斧があり、また、土師器・須恵器・灰釉陶器・内耳土器などが散見されているので、今回の調査地点の近くに縄文時代中期の後半と平安～中世の遺構の存在の可能性を暗示している。

このように、今回の調査は、遺跡の中心部から外れた周辺部の状態を把握するのに有効な調査であったと結論づけておきたい。

引用参考文献

- 1966 尖石考古館 「夢科」
- 1973 霧ヶ丘遺跡調査団 「霧ヶ丘」
- 1974 国谷市教育委員会 「肩平遺跡 長野県国谷市肩平遺跡発掘調査報告」
- 1978 茅野市教育委員会 「よせの台遺跡 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」
- 1980 茅野市教育委員会 「与助尾根南遺跡」
- 1980 長野市教育委員会 「昭和54年度 八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書」
- 1981 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 「昭和51・53年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その4・富士見町その3」
- 1984 東京都埋蔵文化財センター 「昭和58年度 多摩ニュータウン遺跡 (第3分冊)」
- 1984 東京都埋蔵文化財センター 「昭和58年度 多摩ニュータウン遺跡 (第6分冊)」
- 1985 富士見町教育委員会 「御射山遺跡発掘調査報告書 県道払沢富士見線改良工事に伴う緊急発掘調査」

発掘調査団名簿

団長 松沢 達（原村教育委員会教育長）

調査担当者 武藤雄六 平出一治

調査員 小林公明

調査参加者 小林ミサ 林やす子 牛山いねじ 堀内よしぱ 芳沢光世 芳沢つねよ 清水しげ子 清水つね江 清水たけよ 長林みね子 堀内美江（順不同）

事務局 原村教育委員会事務局——行田竹輝（教育次長） 堀内久徳 牛山いさ子

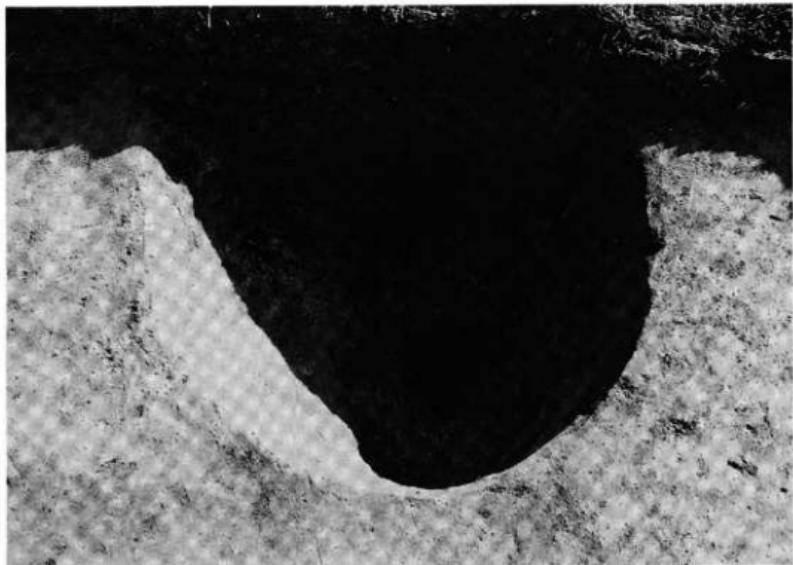


白ヶ原遺跡遠影

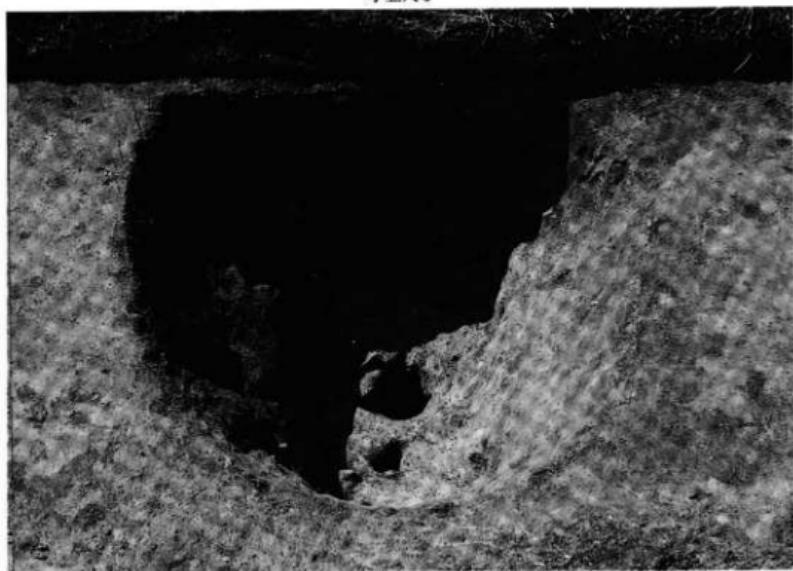


小竪穴 2

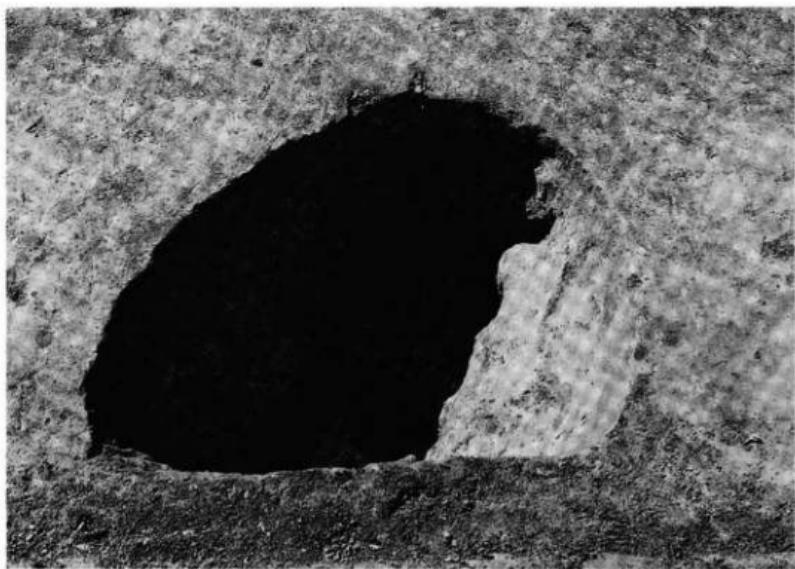
図版 2



小堅穴 3



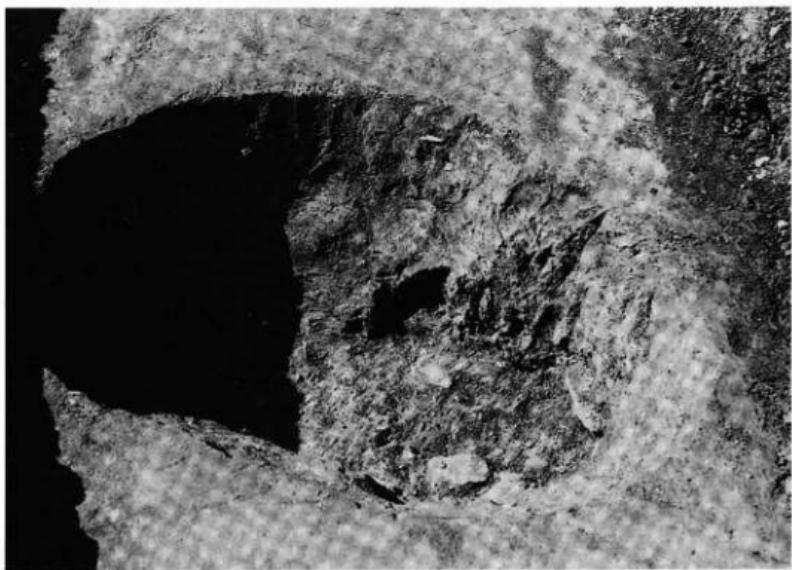
小堅穴 4



小堅穴 5



小堅穴 6



小豎穴 7



小豎穴 8

原村の埋蔵文化財 6

白ヶ原遺跡

村道改良工事に伴う
緊急発掘調査報告書

発行日 昭和62年3月

発 行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所 はおづき書籍株式会社

